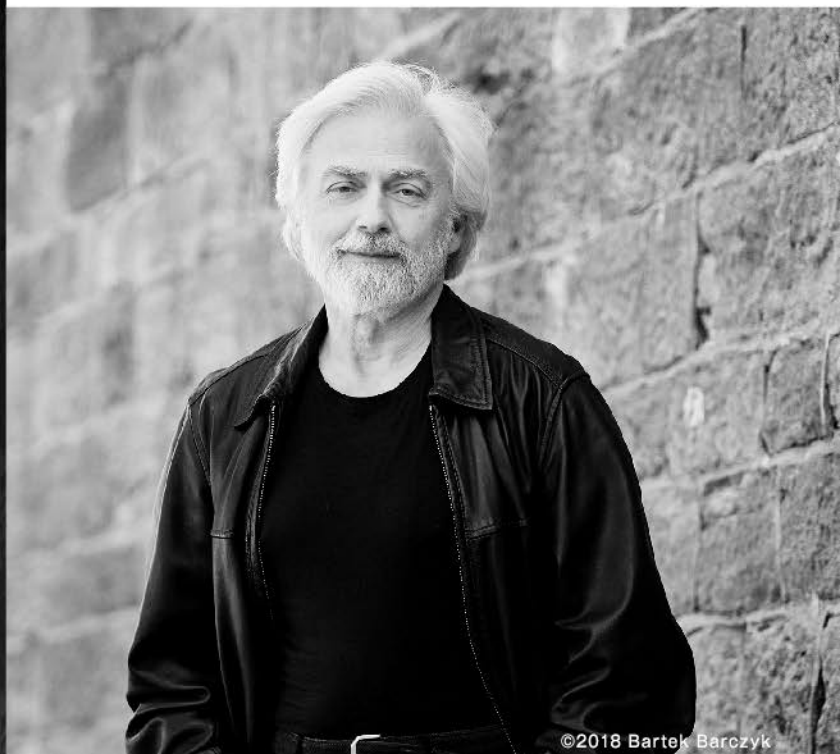


世界が求める、 至高のピアノニズム



©2018 Bartek Barczyk

(Piano) クリスチャン・ツィメルマン

ポーランドのザブジェに生まれる。1975年にはショパン国際ピアノコンクールに史上最年少の18歳で優勝して、一躍世界の音楽界に知られる存在となった。

バーンスタイン、カラヤン、ブレーズ、ジュリーニ、マゼール、小澤征爾、ムーティ、ラトルら多くの卓越した指揮者とも共演し、室内楽では、ギドン・クレーメル、チョン・キョンファ、ユーディ・メニューインらと共演。またCDはドイツ・グラモフォンの専属契約の下に数多くの権威ある賞を受賞している。

2017年9月には、日本国内(柏崎市文化会館アルフォーレ)にて収録したシューベルトの最晩年のピアノ・ソナタ2曲によるソロ・アルバムを25年ぶりに発表し、高い評価を得ている。

国内では、リサイタル・ツアーのほか、ギドン・クレーメルとのデュオコンサート(07年)、チョン・ミョンフン指揮/東京フィルハーモニー(08年)とツィメルマンに捧げられたピアノ協奏曲(ルトスワフスキ作曲)、パーヴォ・ヤルヴィ指揮/シンシナティ交響楽団(09年)とガーシュイン「ラブソディ・イン・ブルー」、ハーゲン・クアルテットとの共演(10年)、2014年にはマリス・ヤンソンス指揮/バイエルン放送交響楽団(ブラームス:ピアノ協奏曲第1番)などが挙げられる。

ベートーヴェン生誕250周年記念となる2020年には、ラトル指揮ロンドン交響楽団とベートーヴェンのピアノ協奏曲全曲を30年ぶりに録音している。

クリスチャン・ ツィメルマン ピアノリサイタル

18歳でショパン・コンクールに優勝して以来、カラヤン、バーンスタイン、小澤征爾、ヤンソンス、ムーティ、ラトルなどの巨匠らと共演を重ね、世界の檜舞台で活躍を続けるツィメルマン。自らが目指す理想の音をいかなる妥協も許さず追い求めるあまり、プログラムのコンセプトに合わせピアノ自体の音色も自ら作り上げ、専用の楽器でツアーを行うことでも知られている。国内でも最も敬愛されている巨匠ピアニストの一人であり、自身もCD録音を国内ホールで行うなど、日本で過ごす時間を大切にしている。21年秋のリサイタルプログラムは未定だが、「必ずや皆様がよるこばれる内容をお約束します」という本人の言葉を信じて待ちたい。



©2018 Bartek Barczyk

新型コロナウイルス対策の実施



消毒の徹底



マスク着用の徹底



身体的距離の確保